

# 第1章

## 第1節 高岡市の強み

まちづくりの基本は、すべての人が一人の人間として尊重され、幸せを実現できるまちを築くことです。

そのための第一歩は、市民一人ひとりが自分たちのまちの「強み」を知り、課題を共有しながら、日々の生活を営んでいくことと考えます。

### 1 底力を見せる町民文化 〈文化力〉

高岡は城下町として開かれ、その後、商工業の町として発展してきました。利長公が奨励した鋳物や指物、漆器などの職人は、藩の庇護を受けながら数々のヒット商品を生み出し、互いに競い合いながら技術を磨き高めてきました。さらに、商人も物資の取引によって力をつけ、これら町の担い手となった町民によって工芸技術や祭礼など「まちの個性」としての文化が受け継がれてきました。

また、明治期の高岡城跡の開拓阻止や町民の浄財と高岡鋳物職人による高岡大仏の再建などに見られるように、高岡の町民は、今でいう「自治」の精神をいち早く体現していました。

このように競い合いながら発展を続けてきた町民の気質は、DNAとしてこのまちに住む人々に受け継がれており、混迷の時代にある今こそ、先人たちが困難を乗り越えてきた歴史に倣い、町民文化としての「自治力」を高めるとともに、時代に合わせた文化の再構築が新たな高岡を創ることを考えます。

### 2 「稼ぐ力」を持つものづくり産業 〈創造力〉

本市は、製造業中心の「ものづくりのまち」であり、特に金属製品製造業、プラスチック製品製造業、化学工業、非鉄金属製造業、パルプ・紙・紙加工品製造業が経済活動を通じて地域内に付加価値をもたらし、さらに地域外からの資金獲得の面でも貢献している基幹産業です。

また、基幹産業の付加価値額、従業者数の特化係数<sup>※1</sup>は2以上、金属製品製造業や非鉄金属製造業にいたっては4以上となっており、「金属加工の分野でできないことはない」といわれるほどの産業集積が進んでいます。

最近では、銅器や漆器といった伝統産業の高い技術力を活かし、現代の生

---

※1  
域内のある産業の比率を全国の同産業の比率と比較したもの。  
1.0を超えていれば、当該産業が全国に比べて特化している産業とされる。

活様式にあったテーブルウェアやインテリアを次々と世に送り出すなど年々、注目を集めています。これらは現代高岡の職人による試行錯誤と柔軟な発想、そして長年培ってきた「用の美」がもたらしたものであり、新たな「稼ぐ力」として認知されつつあります。

市民一人ひとりの「ものづくりのまち」としての誇りと行動によって、本市の知名度、認知度、求心力が高まり、他都市との差別化に繋がると考えます。

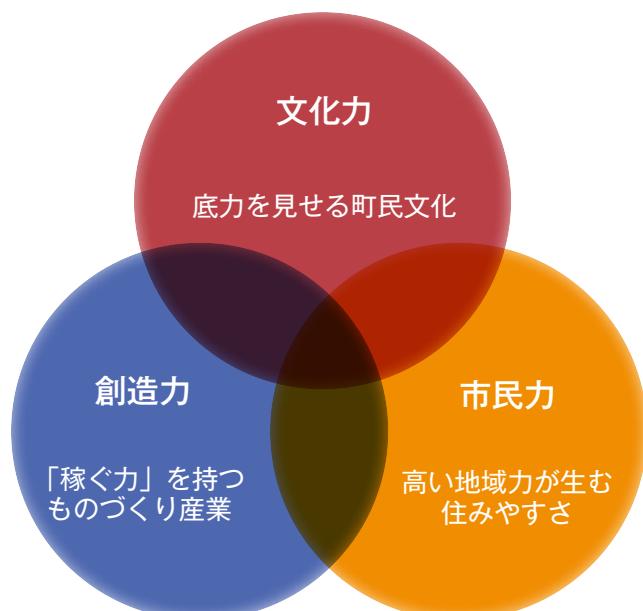
### 3 高い地域力が生む住みやすさ 〈市民力〉

本市は、三世代同居率が全国に比べ高く、安心して子育てを委ねられる父母が同居・近居する環境が多いことに加え、高い有効求人倍率や通勤時間の短さ、保育施設が充実していることなどから、子育て世帯における共働き世帯の割合が高くなっています。1世帯あたりの世帯収入も高い水準にあります。

また、自治会や公民館活動が活発に行われており、地域コミュニティへの参加意欲、地域全体で社会や家庭を支える意識が高い地域といえます。

さらに、台風や地震、津波などが非常に少ないといった地域特性もあり、住みやすさにおいて全国的にも高く評価されています。

このように経済面だけでなく子育てや教育に関する生活環境が充実し、ゆとりある暮らしを維持することが今後も選ばれ続けるまちであると考えます。



## 第2節 高岡市の課題

### 1 ものづくり産業の復興（製造業の低迷）

本市は、製造業を中心とした「ものづくりのまち」ですが、一方で、製造業を取り巻く状況は厳しく、産業経済活動のグローバル化によって新興国との競争が激化し、生産拠点の海外移転などによる産業の空洞化や海外から廉価な商品が大量に輸入されることによる競争力の低下などが懸念されています。また、円安や供給不足による原材料の高騰、生産年齢人口の減少に伴う労働力人口の減少などの課題も浮き彫りとなっています。

本市の場合も付加価値額の減少、雇用吸収力の低下、労働生産性の停滞などがあり、基幹産業であるものづくり産業の再生、競争力強化を行い雇用、所得の創出を行う必要があります。

さらに、製造業だけでなく雇用力のあるサービス産業、経済波及効果の高い観光分野への展開が有効であり、本市の文化遺産や伝統工芸などの観光素材、北陸新幹線など高速交通網を活用した広域観光の推進が求められています。

### 2 若者世代が共感する活力創出（若者の流出）

本市の人口は、昭和 60 年(1985)をピークに減少傾向が続いている。また、年齢 3 区分別による人口の推移をみると、昭和 60 年(1985)に対して、平成 22 年(2010)では 15 歳未満の年少人口が 45% 減少している一方、老人人口は 2 倍以上増加しています。

社会動態を見ると若者世代の転出超過が続いている。これは進学や就職が主な理由として考えられ、女性の場合には、結婚や住宅購入も理由として挙げられ、子育て世代の転出には、年少者の転出も伴います。

このまま「働き手」である生産年齢人口が減少すると、労働力人口が減少し、経済・産業活動の中心となる担い手不足により経済活力の低下が懸念されます。また、一般的に小売業の販売額は、都市の人口規模に応じたものとなっており、人口減少により地域の商業機能が失われ、さらには、医療や生活関連の集積も縮小し、地域の活力だけではなく、「まちの暮らしやすさ」までも低下する恐れがあります。

この急速な人口減少を抑制しつつ、人口減少下においても市民が安心して快適に暮らせる活力ある地域社会の維持が求められています。

### 3 中心市街地のリノベーション（「たかまち」の空洞化）

本市の中心市街地は、高岡駅を中心とする一帯の市街地であり、開町以来の歴史・文化を受け継ぐとともに各時代における産業、行政の様々な都市機能を担ってきた、まさに「高岡の顔」として発展してきた地域です。

一方で、居住人口の減少や空き家の増加、これらに伴うコミュニティの機能低下に加え、商業地区が顧客・住民ニーズに十分対応できていないこと、大規模集客施設の郊外立地などにより、中心市街地が果たしてきた交流拠点としての役割の低下、知的好奇心を刺激し創造性を育む機能などが弱くなり、空洞化が進んでいます。

これまでに培われてきた中心市街地としてのストックを最大限に活用し、新幹線時代の新たな交流・創造拠点として生まれ変わっていくことが求められています。

### 4 周辺市街地の躍動（地域の拠点性の弱体化）

本市の北部に位置する伏木地区は、奈良時代に越中国府となり、近世には古国府勝興寺門前と呼ばれる勝興寺の寺内町として、また、小矢部川河口付近は北前船が行き交う湊町として発展しました。

西部に位置する福岡地区は菅笠の集散地として、また、南部に位置する戸出地区や中田地区は、米のほか麻布などの集散地として町が形成され、いずれも主要な街道沿いにあったことで宿場町としても発展しました。

これらの地域は、明治以降、町制に基づく町としてそれぞれ発展したことから、行政機関や生涯学習、スポーツ施設等が集積しており、生活サービスが比較的容易に受けられる環境にあります。

一方で、商業地区を中心に空き家が目立ち、若者の流出が進んでいるところもあり、各地域の生活サービス拠点としての役割が弱くなりつつあります。

長い年月、人が住み続けてきたという歴史や伝統を知り、課題解決に活かすことで、地域拠点として求心力を高めていくことが求められています。

### 5 高岡駅・新高岡駅の相乗的利活用（交通結節機能の分散）

---

平成27年(2015)3月14日に北陸新幹線が開業し、高岡市から関東圏への交通アクセスは飛躍的に向上し、大幅な時間短縮と大量輸送が可能となりました。物理的・心理的距離が縮まったことにより、関東圏からの観光客は増加傾向にあります。

一方で、新幹線駅である新高岡駅は、在来線駅である高岡駅より南に約1.5kmの地点に設置されており、中心市街地として発展してきた高岡駅周辺と新たな交通結節点となる新高岡駅周辺との役割分担を明確にしていく必要があります。

この2つの交通結節機能を活かし、新幹線開業による波及効果を最大限に活用していくとともに、新たな交流・創造の姿を描いていくことが求められています。

## 6 地域力の再構築（地域のつながりの希薄化）

富山県は、平成17年の調査によると1,000件を超える数の獅子舞があり、全国有数の「獅子舞王国」といわれています。

本市においても全域でこの民俗芸能が伝承されており、左義長などの年中行事とあわせてその土地の歴史や風土を反映した伝統文化として根付いています。

一方で、急速に進む少子化や強固な地縁を嫌う若者の流出といった社会環境の変化によって地域のつながりが弱まってきており、伝統文化の担い手の確保、子育て支援や地域における教育、防犯や防災といった「共助」が難しくなりつつあります。

本市の産業や文化の広がりを担う各地域が、各々の地域資源を磨き、これからの中のコミュニティのあり方を模索していくことが求められています。

## 第2章 まちの将来像

豊かな自然と歴史・文化につつまれ

人と人がつながる 市民創造都市 高岡

里・山・川・海の豊かな自然に恵まれたこの地は、古く奈良時代には越中国府がおかれ、近世に至って、加賀前田家二代当主・前田利長公が城下町として開いたことを契機に、人やものが行き交う商工業の町として発展してきました。

同時に、町の担い手となった高岡の町民は、「ものづくりの技と心」を礎とし、その英知とたゆまぬ努力によって町民文化の花を咲かせ、時代の要請に応えて挑戦と創造を積み重ねてきました。

高岡市は、これらの歴史・文化の伝統に立って、さらに本市が有している可能性と人々の創造力を最大限に發揮し、観光・産業振興等や地域の活性化を実現する『文化創造都市』を推進しています。

我が国が人口減少という構造的な課題に直面している今、わたしたち高岡市民は、自らの手によって時代を切り拓いてきた先人の志を受け継ぎ、創造的で活力あふれる高岡らしいまちづくりを実現しなければなりません。

市民一人ひとりがそれぞれの能力を活かして日々活動し、その営みの中で、次代を担う創造性豊かな市民が育ち、新たなまちを創っていくという好循環にある都市の実現に挑戦していきます。

## 第3章 めざすまちの姿

まちの将来像をさらに17のめざすまちの姿として描き、それぞれの分野別目標として設定し、各施策に取り組んでいきます。

### 地域産業

1 ものづくり産業が時代の流れに対応し、活性化している

2 水・緑・食が豊かで暮らしにうるおいがある

### 歴史・文化

3 世代を超えて受け継がれてきた歴史資産が大切に継承され、輝いている

4 暮らしの中に万葉と前田家ゆかりの文化が息づいている

### 交流・観光

5 高岡の魅力を積極的に発信し、たくさん的人が訪れるようになっている

6 生活の利便性が向上し、市街地に人が行き交いにぎわっている

7 交通ネットワークを活かし、県西部の中核的役割を果たしている

### 子育て・教育

8 安心と希望、ゆとりを持って子育てを楽しんでいる

9 教育を通じて個性を磨き、生きる力を高め合っている

10 いくつになっても興味のあることを気軽に学べている

11 いつでも気軽にスポーツを楽しんでいる

### 安全・安心

12 誰もが生き生きと自立して暮らしている

13 健康的な生活を送り、必要な時に適切な医療を受けられる

14 地域の人々の手で環境が守られている

15 安全で快適な生活を送っている

16 その人らしさが尊重され、お互いに助け合いながら幸せに暮らしている

17 市役所が市民に信頼され、責任を持って取り組んでいる

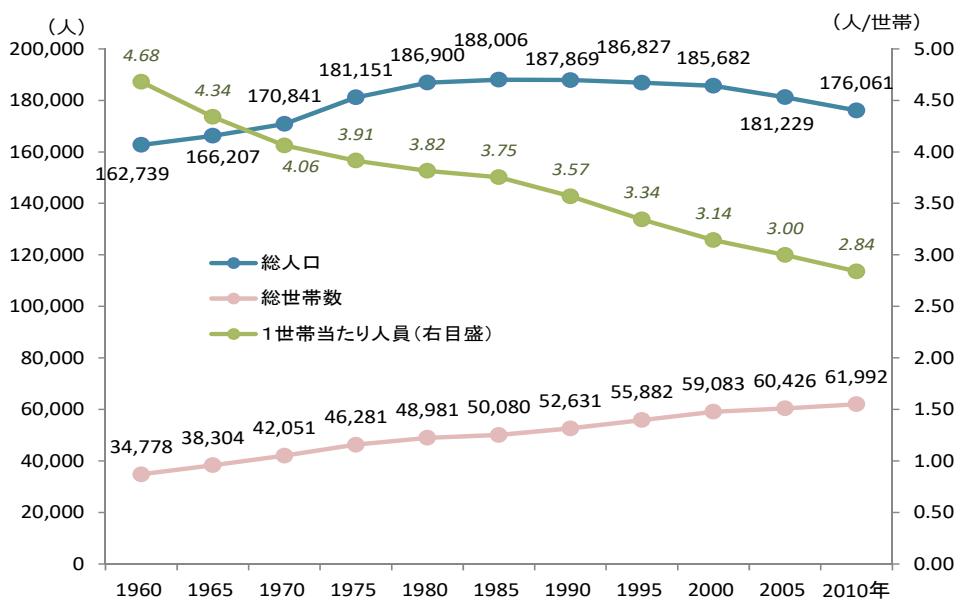
# 第4章 人口の見通し

## 1 人口の現状

### (1) 総人口と世帯数の推移

高岡市の総人口は、昭和 60 年（1985）の 188,006 人をピークに減少傾向にあり、平成 22 年（2010）の総人口は、176,061 人となっています。一方、世帯数は増加が続いており、平成 22 年（2010 年）の世帯数は 61,992 世帯、1 世帯当たりの人員は 2.84 人となっています。

【高岡市の総人口と総世帯数】



出典：国勢調査

### (2) 人口構造の変化

年齢 3 区分別人口の推移では、昭和 60 年（1985）に対し平成 22 年（2010）は、15 歳未満の年少人口が 45% の減少、65 歳以上の老人人口は 2 倍以上に増加、平成 22 年（2010）の高齢化率は 27% と少子高齢化が進んでいます。

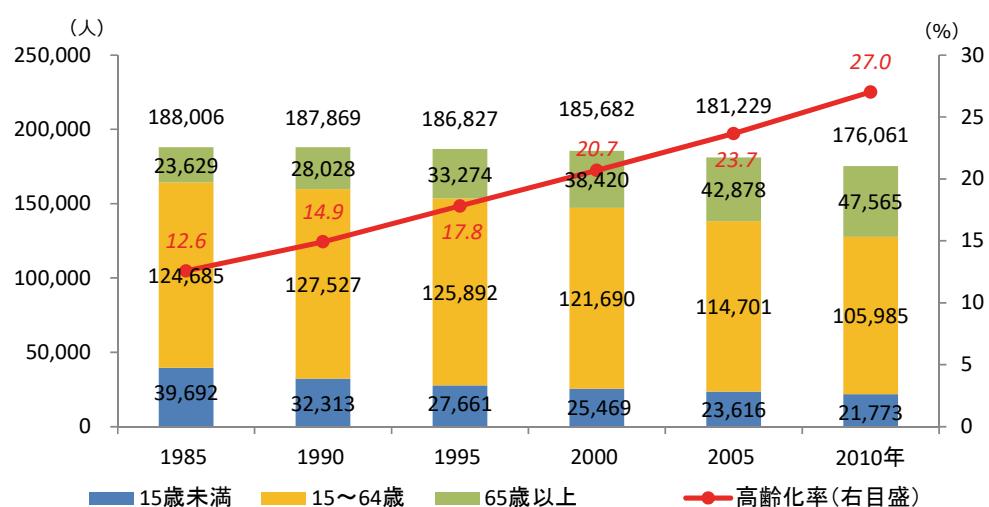
### (3) 人口動態

人口動態については、自然動態、社会動態とも減少傾向にあります。

自然動態は、平成 14 年（2002）に死亡数が出生数を上回って以降、自然減となっており、出生率の低下や女性人口そのものの減少により出生数は横ばいから減少、高齢者人口の増加に伴って死亡数は微増しており、自然減の割合が拡大しています。

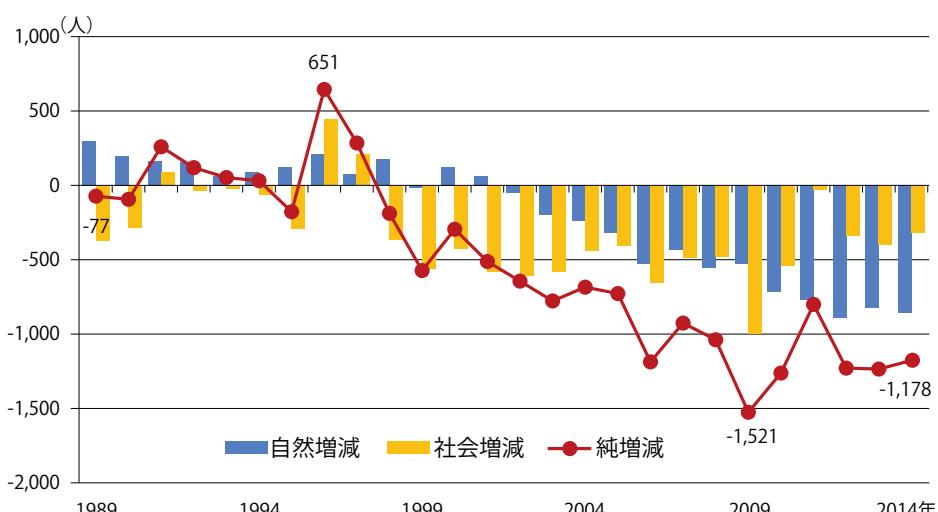
社会動態は、若者の大学進学、その後の就職を契機とする県外への転出、20代後半の女性の就職、30代の子育て世帯の住宅購入に伴う市外への転出などを理由に転出が転入を上回る社会減となっています。しかし、近年は、社会動態が改善しつつあり、本市が定住人口の増加に向け進めてきた「住まい」「働く場」「子育て」を柱とする体系的な取り組み、交流の拡大を定住に結びつける取り組み、都市の総合力向上の取り組みの成果と考えられます。

【年齢3区分別人口と高齢化率の推移】



出典：国勢調査 ※総数に年齢不詳を含む

【人口動態の推移】



出典：富山県人口移動調査

## 2 人口の将来展望

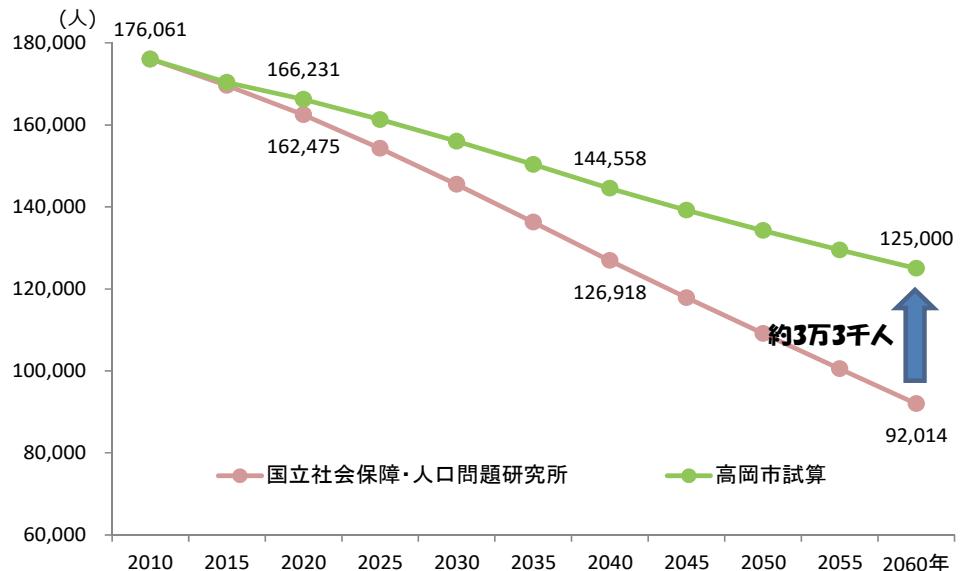
国立社会保障・人口問題研究所の推計に準拠すると、市の総人口は平成 72 年（2060）に 92,014 人まで減少すると推計され、このままでは、生産年齢人口の減少に伴って労働力人口が減少し、経済・産業活動の中心となる担い手不足により経済活力の低下が懸念されます。また、一般的に小売業の販売額は、都市の人口規模に応じたものとなっており、人口減少により地域の商業機能が失われ、さらには、医療や生活関連の集積も縮小し、地域の活力だけでなくまちの暮らしやすさまでも低下する恐れがあります。

このため、まずは社会動態の面から対策を強化し、人口減少の抑制を図るとともに、人口減少に対応した地域づくりを進めます。また、人口減少問題の根本的な解決には、出生率の向上が不可欠となるため、女性人口そのものの確保に努めながら、長期的な視野で若者の結婚・出産・子育ての希望の実現を図ります。

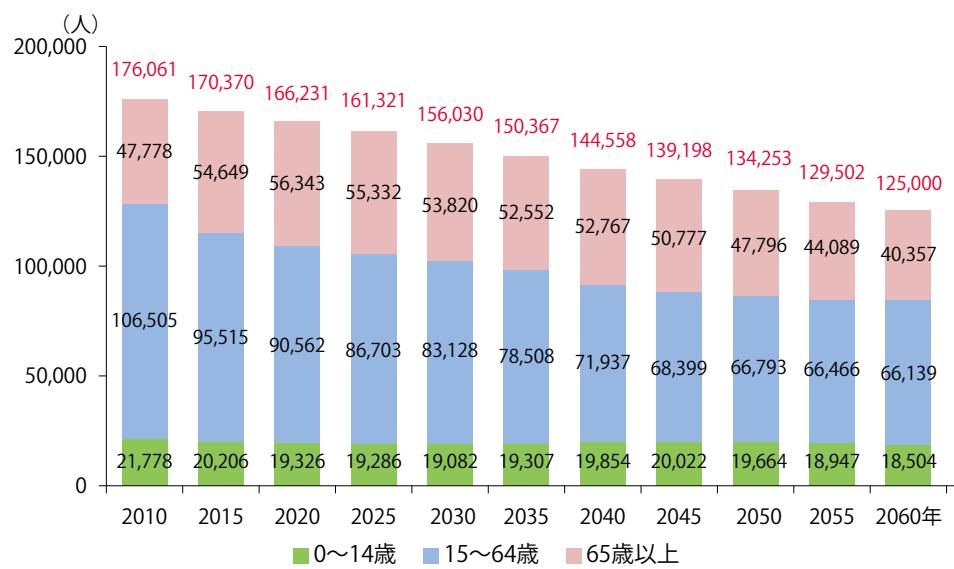
具体的には、これまでの「住まい」「働く場」「子育て」を柱とする定住人口増加の取り組みを強化しながら、若者の流出が進んでいる市の人口の現状を踏まえ、魅力的な仕事づくりや住みやすい環境の整備による若者の定住の促進、子育てしやすい環境づくり、仕事と子育てを両立しやすい環境の整備による安心して子どもを産み育てられる地域社会の実現、コンパクト・アンド・ネットワークの推進による人口減少に対応した地域づくりなどの取り組みを進めます。

こうした政策努力によって、現状 1.5 程度の合計特殊出生率を平成 42 年（2030）に 1.9 程度、平成 52 年（2040）に人口置換水準の 2.07 程度まで上げ、社会動態を平成 32 年（2020）までに均衡状態とし、その後は転入超過とすることで平成 72 年（2060）に 125,000 人の人口を維持することとします。

### 【将来人口の推計】



### 【年齢3区分別の将来人口の推計】



# 第5章 土地利用と都市構造の考え方

## 1 高岡市の広域的位置づけ

本市は、東京、大阪、名古屋といった3大都市圏からほぼ等距離に位置し、東西軸としての北陸新幹線及び北陸自動車道、南北軸としての東海北陸自動車道、能越自動車道が交差する高速交通網の十字路を有する地域の中核的都市として位置づけられます。

また、本市は日本の中央部に位置し、日本海側有数の良港である伏木富山港を擁し、「総合的拠点港」として環日本海交流の役割も担っています。

加えて、北陸新幹線の開業により、首都圏との時間的距離が縮まり、飛越能そして環日本海諸国の玄関口としてこれまで以上に「ヒト・モノ・コト」の交流の拡大が期待されます。

【広域図】



富山県西部地域においても、本市は、あいの風とやま鉄道をはじめ氷見線、城端線、万葉線など、放射線状に県西部の全市をつなぐ交通網の要衝であり、豊富な地場産業を持つ産業のまち、歴史と文化あふれる観光のまち、多くの高等教育機関を有するまちとして、県西部の経済、文化、情報の多彩な交流拠点の役割を担ってきました。

平成22年の国勢調査では、本市へ流入する通勤・通学者数は1日あたり約

25,000人であり、このうち、県西部地域からの流入で全体の約8割を占めています。

これらを踏まえ、本市を含めた県西部6市の連携により、圏域全体の経済の活性化や交流・定住人口の拡大を図るため形成した「連携中枢都市圏<sup>※1</sup>」の取り組みを進めていきます。

今後、人口減少・少子高齢社会のさらなる進行が予想される中で、圏域最大の市である本市は、北陸新幹線の開業を追い風に、これまで培った強みを活かして、この連携中枢都市圏の取り組みを力強くけん引し、圏域の中核的都市としての役割を果たしていきます。

〔富山県西部地域〕



※1  
相当の規模と中核性を備える圏域の中心都市が近隣の市町村と、連携協約を締結することにより、都市圏を形成し、圏域の活性化を図ろうとする構想。

## 2 土地利用の考え方

土地利用については、都市的土地利用と農業的土地利用、自然的土地利用の3つに区分し、それぞれの調和を図りながら、地域の特性に配慮して計画的に行います。

### (1) 都市的土地利用

人口減少や少子高齢化が進行する中、市街地の無秩序な拡大を抑制し、各地域の特性に応じた都市機能の強化を図るとともに、公共交通等のネットワークの充実を図ります。

都心エリアの土地の高度利用を図るとともに、市街化区域内の低・未利用地や農地などの多面的活用を促進します。

幹線道路沿いや市街地隣接地域などにおいては、開発と保全の調和のとれた土地利用を図ります。

### (2) 農業的土地利用

農業者の生産基盤を支える生産性の高い地域においては、優良な農地の確保を図り、当該農地を良好な状態で維持・保全し、かつその有効利用を図ります。

その他の地域においては、農業生産活動との調和に配慮しながら、計画的な土地利用を図ります。

### (3) 自然的土地利用

雨晴海岸や二上山、西山丘陵地などの優れた自然景観・環境の保全を図るとともに、地域の特性を活かした土地利用を図ります。

### **3 都市構造の考え方**

本市は、昭和・平成の合併を経て、固有の文化を持つ複数の市街地が存在しております、それぞれの外側に農業・自然地域が広がる都市構造となっています。

人口減少や少子高齢化が進行していく中、本市の成り立ちや都市基盤整備状況等を踏まえつつ、各地域の特性に応じた都市機能や居住機能をそれぞれの市街地内に誘導するとともに、それらを公共交通等で結ぶ「コンパクト・アンド・ネットワーク」のまちづくりに取り組み、機能性、安全性、利便性の高い持続可能な都市づくりを目指します。

#### **(1) 都心エリア**

本市のみならず、県西部地域においても中心的役割を担う地区として、新高岡駅から高岡駅を経て、中心市街地に至る都心軸を中心に高次都市機能の集約を図ります。

#### **(2) 周辺市街地エリア**

周辺市街地エリアでは、住民が地区内で快適な日常生活を送ることができるよう、各地区の生活拠点に必要なサービス機能を配置します。

#### **(3) 交通ネットワーク**

都心エリアと周辺市街地エリアの連携が十分に機能するよう、公共交通等のネットワークの充実を図ります。

広域的観点から、大都市圏及び県西部地域との広域交流を促進するよう、高速交通網と地域交通網との連携の充実を図ります。

【土地利用概念図】

